



## 「アドレッセンス中葉」とは何だったのか： その同時代性と宮沢賢治の戦略性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 花奈 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000379">https://doi.org/10.32150/0002000379</a>

# 「アドレッツセンス中葉」とは何だったのか

——その同時代性と宮沢賢治の戦略性

石 井 花 奈

本稿の執筆動機に、拙稿「『タブーの崩壊』と有島武郎の童話「溺れかけた兄妹」」（『児童文学研究』二〇二〇年三月）がある。一九七〇年代後半に児童文学の領域で話題となった「タブーの崩壊」と、「タブー」そのものが自覚されていなかった時代の有島童話が共鳴した最大の要因を、物語行為を前景化させた散文性にあることを指摘した論考である。執筆以後、次のような考えがいつも頭のどこかにあった。有島童話のもつ散文性は、有島が「年齢に制限はいらぬ」（合評「童話について」、『著作評論』一九二〇年一〇月。引用は『有島武郎全集』第八巻、一九八〇年一〇月、筑摩書房に拠る）と述べていたことと関わっているのではないか。「童話」と称しながらも実質的には対象年齢を設けずに創作しようという執筆態度もまた、「タブーの崩壊」から「ボーダーレス」へと移っていく現代児童文学の流れと共鳴する一因となっていたのではないか。

このことを更に押し広げて考究するために着目したいのが宮沢賢治の、たった二冊の生前刊行のうちの一冊である童話集『注文の多い料理店』、その「新刊案内」（一九二四年一月一五日

発行）に掲げられた「少年少女期の終り頃から、アドレッツセンス中葉に対する一つの文学の形式」という言辭である。日本において子供のための文学の確立期にあたる大正期には、「童話」というジャンルが想定する対象年齢についての共通認識はまだ形成されていなかったと推測されるが、有島と賢治がそれぞれ対象年齢について思索を巡らせ、そのうえで童話を創作していたという共通性は一考に値すると考える。

賢治が掲げた言辭の意味を誰よりも丁寧に汲み取ろうとしたのは、三〇数年に亘る全一回の講演で宮沢賢治について語ってきた吉本隆明であったように思われる。本稿は有島武郎を参照項としつつ、吉本隆明や柄谷行人の言説を梃とすることによって、宮沢賢治が掲げた「文学の形式」の戦略性を明らかにすることを目的とした小論である。まずは、本稿が分析対象とする「新刊案内」の記述を次に引用する<sup>(1)</sup>。

この童話集の一例は実に作者の心象スケッチの一部である。それは少年少女期の終り頃から、アドレッツセンス中葉に対

する一つの文学の形式をとつてゐる。

この見地からその特色を教へるならば次の諸点に帰する。

□ これは正しいものゝ種子を有し、その美しい発芽を待つものである。而も決して既成の疲れた宗教や、道徳の残滓（滓）の誤植（誤植）を色あせた仮面によつて純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない。

□ これらは新しい、よりよい世界の構成材料を提供しやうとはする。けれどもそれは全く、作者に未知な絶えざる警（驚）の誤植（誤植）異に値する世界自身の発展であつて決して畸形に涅（涅）の誤植（誤植）ねあげられた煤色のユートピアではない。

□ これは決して偽でも仮空でも窃盗でもない。

□ 多少の再度の内省と分折（分折）の誤植（誤植）とはあつても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれは、どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な文である。

□ これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつや、かな果実や、青い蔬菜を（と）の誤植（誤植）と一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。

これを論者なりに噛み砕いてみるならば、次のようになる。

「心象スケッチ」とは、「作者」の心の中にあられたものを

作品化したものである。それは「正しいものゝ種子を有し、

その美しい発芽を待つもの」としてある。「多少の再度の内省と分折（分折）」とは加えられているけれども、できるだけ「心象の中に現はれた」とおりに描いた。それは「作者」にとつてさえ「未知な絶えざる警（驚）異に値する世界自身の発展」であるが、「決して偽でも仮空でも窃盗でもない」ため、「どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通」であると「作者」は考えている。そのような「心象スケッチ」はしかし、「卑怯な成人たち」には「畢竟不可解」であろう。彼らは「既成の疲れた宗教や、道徳の残滓（滓）、さらには「畸形に涅（涅）ねあげられた煤色のユートピア」を「純真な心意の所有者たちに欺き与へんとする」者たちである。だからこの童話集は「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉に対する一つの文学の形式」をとる。

特徴的なのは、説明の過程でその仮想敵が一定の強度をもつて同時に立ち上がるレトリックになっていることである。続橋達雄「童話作家としての賢治」（同著『宮沢賢治・童話の軌跡』一九七八年一〇月、桜楓社）が「賢治童話の誕生と展開とは大正児童文学の隆盛期とほぼ一致」していたことを指摘しているように、ここでの仮想敵は主として『赤い鳥』に代表される同時代の芸術運動の動向であり、その担い手である「成人たち」であつたと思われる。「新刊案内」であるから他との差別化を図るのは当然だが、その筆致が非常に批判的であることには留

意しておきたい。

## 1 問題の所在

これまで「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉」という読者の限定の仕方は、賢治研究においてどのように把握されてきたであろうか。管見の限りでは、それ自体重要視されてはいるものの、同時代の童話群と比して賢治童話がもつ異質性の根拠とされたり、個別の作品分析における考察の手掛かりとされたりすることがほとんどのようである。

小倉豊文「新しい古典復刻の弁」（角川文庫版『注文の多い料理店』一九五六年五月。引用は改訂新版一九九六年六月に拠る）は、「作者自身が公表を決意したところの完成した定稿と、作者自身の意思に関係なく公表された未完成の未定稿との間には、少なくとも一定の考慮を払わなければならない」という考えのもと、「新刊案内」を「賢治の数少ない童話に関する意見の論文的な表現」として貴重視し、復刻に際して付録として収録している。その一方で、原子朗『定本 宮澤賢治語彙辞典』（二〇一三年八月、筑摩書房）では「青年期、思春期（一般に一二～一三歳から二〇歳前後までを言う）」、「現在の中・高生の時期と考えてよい。賢治の童話創作の意図を測る上で重要」という説明に留まっている。『宮沢賢治大事典』（渡部芳紀編、二〇〇七年八月、勉誠出版）および『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（天沢退二郎・金子務・鈴木貞美編、二〇一〇年一二月、弘文

堂）においては立項されていない。ただし、『宮沢賢治大事典』の「雪渡り」の項（赤田秀子著）に「当時の童心主義や、『注文の多い料理店』広告文の「アドレッセンス中葉」との関連も含め多くの論及がある」という記述を確認することができる。

「雪渡り」は『注文の多い料理店』に先立つ一九二一年一月・翌一九二二年一月に『愛国婦人』に連載された数少ない生前発表作品の一つで、原稿料をもらった唯一の作品であると考えられている。四郎とかん子が子狐の紺三郎と出会い、狐小学校の幻燈会に招待されるというのが大筋で、十二歳以上である四郎の兄たちの参加が断られる場面がある。この年齢制限との関連が指摘されてきたというわけである。

このような研究状況の中で特筆したいのは、西田良子「賢治童話における「雪渡り」の位置」（同著『宮沢賢治読者論』（二〇一〇年三月、翰林書房）における「賢治は、さまざまな題材で書いた多彩な自分の原稿を、対象年齢や題材に従って、十二のグループに分けて、童話集『注文の多い料理店』のような童話集を、十二冊作りたいと考えていたと思われる」という指摘である。「双子の星」（生前未発表）の原稿表紙には「一層の無邪気さとユーモアとを有らざれば全然不適」「尋四年以下の分」との書込みが、「貝の火」（生前未発表）の原稿表紙には「第一集中」「単純化せよ」「無邪気さをとれ」、「雪渡り」（発表後手入形）には「要再訂」「第一集」との書込みがあるという。これらのことから西田は、賢治が「尋四年以下」の童話集を計画

していた可能性を指摘し、賢治童話はその全てが「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉」を対象にしたものではなく、「三・四年生を讀者と考えていた作品」もあるとした。

西田の指摘は、賢治が宛先としての子供を觀念的に想定していたのではなく、自身の童話の讀者を具体的に想定して対象年齢を検討していたことを示唆する重要な指摘である。だが、西田を含めた研究蓄積を通してみえてくる問題は、賢治が設定した区分を子供の成長段階として自明視してしまっていることである。「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉」を対象讀者とするという発想は、同時代においてどのようなものだったのか、まずはこの点から問い直さなければならぬ。

## 2 「アドレッセンス」の同時代性

そもそも、「アドレッセンス」とは同時代においてどのような用いられ方をした語だったのだろうか。そのような同時代性に着目したものとして、大沢正善『注文の多い料理店』の世界——童話集としての可能性——（『文芸研究』一九九六年一月）がある。大沢は「青年期」を意味する「アドレッセンス」(Adolescence)は、発達心理学の名著、シユプランガー『青年期の心理』(1924)によれば、八歳頃から一二歳頃までの少年・少女期に続く一四歳頃から二四歳頃までと考えられ、今日でも一般に通用している。それは、発達心理学の基礎を築いたホール『青年期』(G・S・Hall "Adolescence" 1904)が、前思春期

とそれに続く青年期に設定した年齢を受け継いでいる」と説明しつつ、「上下二巻千三百頁を越えるホールの大著の翻訳は現在に至るまでなく、賢治が原著を読んだかは不明である」と述べている。

ホール(Granville Stanley Hall)は、朝日由紀子「子どもの発見——G・スタンレー・ホールの「児童研究」をめぐって」(『アメリカ研究』一九九五年三月)によれば「一八九〇年代から一九一〇年代に至る、アメリカで端を発し、ヨーロッパ、アジアにも波及した「児童研究」を「提唱し、強力に推進した人物」である。ホール以前には「子ども」は単一の集団であり、「子ども」の時代を過ぎると直ちに「大人」と見なされていた」が、ホールは「子ども」をさらに「児童期」と「青年期」に区分して後者に「特別な意義を認め」、「一九〇四年の大著『青年期』にその研究成果をまとめ」たという。

賢治が用いた「アドレッセンス」という語の由来として、大沢の指摘はおそらく当たっている。国立国会図書館NDL Japが提供するeNDL Ngram Viewerを活用してこの語の出現時期・出現比率・用例を確認してみたい。結論から述べると、この語が初めて出現するのは一八九三年で、出現比率が最も高くなるのは一九〇九年、その後一九三〇年頃までは一定の出現率を保っている。初出と目される記述は金港堂編輯所訳『第十九世紀之教育』(一八九三年、金港堂。月日の記載なし)中の文学士上田萬年「言語及び其教授法 附録」に登場する。「小学の

監督を脱したる、アドレッセンス（春情発生期より体格同定期まで）の時期」（一）内は割注、62コマ）という記述である。

出現比率が突出する前年の一九〇八年を見ると、「アドレッセンス」という語がホールに関する文脈の中で現れてくることが分かる。その一例として乙竹岩造『実験教育学』一九〇八年一月、目黒書店）を紹介する。「青年教育は之れを児童研究に比すれば、其の起原は非常に新しいのでありますけれども、之れに反して其の發達は非常に速いのでございまして、最近の研究家は大に此の方面に力を注ぎ、かのスタンリー、ホール教授の著「アドレッセンス」即ち「青年時代の研究」の如きは渾然たる大著であります」（112コマ）。

ホールの著作が、特に一九〇八頃から教育学や児童学の領域でにわかに注目の書として話題となり、文学の領域では一九一三年一〇月刊行の生田長江編『文学新語小辞典』（新潮社）、一九一四年三月刊行の大畑匡山著・西村醉夢補『現代文芸新語辞典』（東条書店）、一九一八年九月刊行の小山内薫編『文芸新語辞典』（春陽堂）等に立項されたことが確認できる。大沢のいうように同時代においてホールの全訳はなかったが、要所を中心に翻訳したものととして中島力造・元良勇次郎・速水滉・青木宗太郎共著『青年期の研究』（一九一〇年八月、同文館）が確認できる。「新刊案内」に掲げられた「文学の形式」は、このような同時代状況と確かな接点をもっていたのである。

### 3 有島武郎と宮沢賢治

だが、教育学や児童学の領域で注目されたホールの知見が、ただちに児童文学の領域に取り入れられたわけではなかったものと推測される。本稿冒頭で言及した合評「童話について」（書誌情報前掲。出席者は有島武郎、堺利彦、生田長江、長谷川如是閑、大庭柯公、馬場孤蝶の六名。発言者はイニシャル表記）を、やや長くなるが引用する。

○ だが童話が標的としているのは、何歳位の小児だらうか、何歳位までの小児の読物なんだらう。

A 私が一度「一房の葡萄」を書いた動機は一体今までの童話には子供に読ますものとしては子供の心持を標準として書いたものがない様に思へたので書き始めたのです。私の記憶によつても大人のする事でどうしても子供時代の私の心持ちにそぐはないと思ふ事が度々あつた。そんな時子供の心持に同情者となつてくれるものがなかつた。

○ 実際さう云ふ立場からしたもののが、成る程小児には必要だらう。しかし童話とは本来何を目的として書くべきものかぬ。

H 教訓を目的としてはいかぬ、道徳はいらぬ、子供の空想を大人が書いてやればよい。丁度芝居が勧善懲悪を離れて行く様に童話も教訓的な所を段々と離れて行かぬばなるま

い。童話の出立点は、だから童話にあるのぢやないか。

S 非教訓的なのに反対はしないが、非教訓的と云ひながら  
実は保守的伝統的思想に利用されるのに困る。

A 岩谷小波氏一派はその意味で全く困つたものですね、あ  
れは奴隷道徳を教へるものだ。

H 然し小波のは外国の翻訳ぢやないのか。

A 翻訳が大部分であらうが、やはり奴隷道徳を教へるもの  
ばかりだ。

[略]

S 然し相当な年になつたら世間の複雑な關係を知らせねは  
ならぬ。そこでO君のさつき云つた様に、童話は何歳位迄  
の子供に読ますものかと云ふ事が定まらねばならない。

A いや年齢に制限はいらぬ。何歳迄でもいいと思ふのだ。  
その子供がその儘大人になり、その要求を徹底させようと  
すると矛盾に出遭ふ。それに疑ひが生じて来る。而してそ  
こから始めて世界は改造される。

「童話」と称されるジャンルが想定する年齢、それが果たす  
べき役割について議論が行なわれている。それは裏を返せば、  
大正期において当該ジャンルが想定する読者の年齢に共通認識  
はなかったということを示唆しているよう。実際、『赤い鳥』に  
小学校低学年を対象とする「幼年童話」が掲載されるようになる  
のは昭和に入ってからであった。くわえて、この合評会にお

いて童話が「教訓的」なものや「奴隷道徳」を教えるものであつ  
てはならないという認識が共有されていることは、本稿の関心  
において重要である。ここでの批判対象は日本で初めての創作  
童話とされる「こがね丸」を執筆した巖谷小波をはじめとする  
作家たちだが、こうした議論の中で『赤い鳥』のことは当然念  
頭に置かれていたとみるべきである。「岩谷小波氏一派」が「奴  
隷道徳を教へるもの」であることは確かだという有島の厳しい  
指摘は、では現在進行形の『赤い鳥』などはどうかという問題  
提起も含んだ議論だったように思われるのである。

そのとき有島が理念として掲げたのは「同情者」としての童  
話、「大人のする事」が「そぐはない」という「子供の心持」  
に寄り添うものとしての童話であった。それまで執筆してきた  
小説とは異なるものとして「童話」と称されるジャンルを捉え、  
子供を主な対象読者としながらも「年齢に制限はいらぬ」とい  
うとき、そこには子供が大人になるまでの時間が射程に含まれ  
ている。その過程で出遭ふこととなる「矛盾」や、それによつ  
て「疑ひが生じて来る」自身の「要求」、そのような時間に寄  
り添うものとしての童話を目指していたのが有島である。

これを参照項としながら、改めて賢治が設定した対象年齢に  
立ち返ってみたとき、二人の作家には三つの共通点を指摘する  
ことができる。第一に同時代の童話が「奴隷道徳」あるいは「既  
成の疲れた宗教や、道徳の残澤」を与えんとするものであると  
いう批判的な認識、第二に「子供」を一括りにせず、その成長

過程を想定しながら童話を執筆する態度、第三に大人と子供との間にある溝に目が向けられていることである。ただし第二については、有島が子供から大人への過程をゆるやかに把握しているのに対し、賢治がより段階的に区分していることには留意しておく必要がある。「少年少女期」の全体でもないしその始めの方でもない。「アドレッツセンス」の全体でもないしその終りの方でもない。いわば間の中葉、この中間性こそが重要なのであり、だからこそ「成人」との間にある溝への意識が高まり、「成人」に対する排他的な力学が強くはたらくのであろう。「アドレッツセンス中葉」という言葉はそれ単体で取り出せるものではなく、「少年少女期の終り頃から、アドレッツセンス中葉」という、同時代に共有されつつあった最先端の知見を応用した賢治独自の区分である。

#### 4 「われら」という連帯感

一九七一年二月四日に日本女子大学で行なわれた吉本隆明の講演「宮沢賢治の童話について」（主宰は日本女子大学児童文学研究室ほか。のち『賢治研究』一九七二年四月に掲載。引用は、同著『宮沢賢治の世界』二〇一二年八月、筑摩書房に拠る）において、吉本は賢治の区分を「直接的に規定するのは大変難しい」としながらも、あえて次のように規定してみせる。

子どもの世代が親の世代に対立し、それを超えようと思

いながら、それにはどういう方法があるかわからない。また、今まではあたかも自分と非常によく調和し、あるいは無意識のうちに調和しているようにみえた自分以外の世界、自分以外の人間、そういったものが急に非常に対立的にみえてくる。「略」賢治のいつているのは、そういう時期にさしかかる直前の状態というか、萌芽の状態であろうと思われます。／「略」／それに入ろうとする直前の時期にもう一つの世界が現れるわけで、これはいうまでもなくセックスの世界です。「略」これは狭い意味での恋の世界というのではなく、自分と自分以外の一箇の——多勢ではなく、ただ一箇の——人間との関係が、自分に対し、はじめて非常に切実かつ先鋭な形で出現することを意味します。

「セックスの世界」は、「親の世代に代表・象徴される自分より前の世代」に対する「対立感」「孤独感」を深めたときに同時に現れるとして、そのような「生涯最初の大困難の時期」の「直前の状態」こそが、賢治が指示する「少年少女期の終り頃から、アドレッツセンス中葉」であると規定した。既に述べたように、賢治の区分は「卑怯な成人たち」を排除することによって成立する区分である。その意味で吉本の指摘は説得力があるし、「少年少女期の終り頃」という線引きの仕方も、成人への依存から徐々に距離を取り始める時期と捉えれば説明がつく。

この吉本の規定の仕方と併せて検討したいのが、柄谷行人「児



童の発見」〔『群像』一九八〇年一月。引用は、同著『日本近代文学の起源』一九八八年六月、講談社文芸文庫に拠る〕である。

「児童」という制度を暴いていく過程において「青年期の出現が「子供と大人」を分割」し、その「分割」が今度は逆説的に「子供と大人の絶対的区別をとりはらう」と喝破したことは周知のとおりである。そのうえで柄谷が評価したのは樋口一葉であった。

子供のために書かれたものではないが子供のことを書いたすぐれた作品を見出すことができる。樋口一葉の作品である。彼女が書いたのは、いわゆるアドレッセンスではなく、子供がそのまま小さな大人であるような世界に浸透してくる一つの亀裂、つまりまもなく過渡期として顕在化してしまふアドレッセンスの徴候だったといえる。樋口一葉こそ、子供時代について書き、しかも「幼年期」や「童心」という転倒をまぬかれた唯一の作家であった。(傍点原文)

ここでの「アドレッセンス」という語は、おそらく心理学一般における学術用語として用いられている。だがホールが提唱した青年期は、柄谷が「児童の発見」の中で言及したルソーやフロイトの影響を受けたものであるため、ここでの「アドレッセンス」も本稿の文脈で読んで差し支えないだろう。

柄谷の評価によれば、一葉の作品は「子供のために書かれた

ものではない」、つまり「童話」として書かれたものではないが、結果的に「アドレッセンスの徴候」を描いてみせた「すぐれた作品」である。柄谷のいう「アドレッセンスの徴候」とは、「子供がそのまま小さな大人であるような世界に浸透してくる一つの亀裂」を指す。この考え方は先に引用した吉本の考え方とよく似ている。自分と「調和しているようにみえた自分以外の世界、自分以外の人間、そういったものが急に非常に対立的にみえてくる」、これを「亀裂」と表現したのが柄谷である。「アドレッセンス」を描いたのではなく、「アドレッセンスの徴候」を描いたというとき、それはまさしく賢治が設定した「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉」に相当する。一葉が「幼年期」や「童心」という転倒をまぬかれ「アドレッセンスの徴候」を描きえた作家ならば、賢治は大人と子供の区別が逆説的に連続性へと転化していく同時代言説の中に積極的に参入し、それを応用しながら独自の区分を立ち上げて宛先とした作家だといえることができる。いわば賢治は、「子供のため」の「文学的形式」を戦略的に構想したのである。

賢治の戦略における肝は、仮想敵として立ち上げた「卑怯な成人たち」を排除することによって醸し出される連帯感である。「新刊案内」には、「作者」という語のほかに「われら」という一人称複数の主語も登場する。四の「われらは田園の風と光との中からつや、かな果実や、青い蔬菜を一緒にここれらの心象スケッチを世間に提供するものである」という一文に現れる「わ

れら」である。ここに含まれるのは「作者」と、あとは誰であろうか。『注文の多い料理店』という童話集の制作に携わった人々であろうか。少なくとも「青少年女性の終り頃から、アドレッセンス中葉」という区分によって指示される読者たちはここには含まれていない。彼らは「心象スケッチ」を「提供」される側だからである。しかし、このように浮かび上がってくる両者の間で、提供と享受の関係性が成り立ったそのときにこそ連帯は生まれる。

「われら」という一人称複数と共に見逃せないのは、賢治は「新刊案内」において一度たりとも「子供」という語での呼びかけを行なっていないという点である。「子供」という呼びかけは、「大人」「成人」とは異なる存在であるという認識のもとで使用されるものであるから、それを使用した途端に区別が生じ、大人あるいは成人から子供へとトツプダウン式に何かを与えるという構図ができてしまう。したがって「子供」と呼びかけないことには、読者と対等な者でありたいという「作者」の志向性を見て取ることができる。しかしながら、「作者」が創作物に対して特権的な位置に存する限りトツプダウンの関係性に陥ってしまう惧れは依然として残る。そこで選出された主語が「われら」だったのではないだろうか。

「卑怯な成人たち」とは違う、「作者」を含む「われら」。それは「成人たち」が「純真な心意の所有者たち」に「既成の疲れた宗教や、道徳の残澤」を与えんとする者たちであることを

分かつている「われら」である。大人あるいは成人と子供との間に溝があることを知っている「われら」である。そのような「卑怯な成人たち」には「畢竟不可解」なものを、「作者」を含む「われら」と共に共有しようという連帯感、この身振りこそが「青少年女性の終り頃から、アドレッセンス中葉に対する一つの文学的形式」であり、童話集『注文の多い料理店』の戦略的手法だったのである。

小倉豊文が述べていたように、宮沢賢治という作家において「作者自身が公表を決意した」定稿の意味は重い。中でも童話集『注文の多い料理店』は、隆盛を極める芸術運動の中に乗り出していくための渾身の作であつただろう。本稿で明らかにした賢治の同時代状況の中で練られた戦略性は、彼の文学的営為の新たな側面を照らし出すものであると考える。

## 注

(1) 引用は『新]校本宮澤賢治全集第二二巻童話V・劇・その他校異篇(一九九五年一月、筑摩書房)に拠る。引用中にある丸括弧内の誤植修正の記述は引用元に従った。また、引用元には赤字で刷られた部分を示す圏点が付されているが、本稿の引用に際しては省略した。引用箇所の前には「イーハトヴ」に関する説明が、後にはこの童話集が「十二巻のシリーズの中の第一冊」であり、「先づその古風な童話としての形式と地方色とを以て類集したも

の」であることが示され、目次と共に各童話の「説明」が記されている。その内容や文体から賢治の手に成るものと考えられている。この「新刊案内」が出回った範囲は未詳だが、奥付の発行所には「盛岡市厨川館坂五六 杜陵出版部」と「東京巢鴨町宮下一七九四 東京光原社」が併記されている。『注文の多い料理店』の発行は一九二四年二月、挿絵装幀は菊池武雄による。発行者は近森善一、印刷者は吉田春蔵で兩名の住所はそれぞれ杜陵出版部、東京光原社に同じ。発売元もその二社である。

(2) 「心象スケッチ」の意味を探った研究が既に多く蓄積されている。だが本稿の目的は、「心象スケッチ」という言葉で表現される文学的営為が「少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉」を宛先とするというその態度や思想の再考であるため、この語の意味は「新刊案内」中の表現で把握するに留める。

(3) 最終利用日は二〇二四年九月一九日。その時点において対象となる全文テキストは「二〇二三年一月現在」のもので、図書・雑誌資料約二三〇万点である。検索に際して、「アドレッセンス」の促音は大書きと小書きの両方が検索対象となるようにスラッシュ区切りでクエリに設定した。対象とする出版年代の範囲は一八六八年から一九四五年とし、「キーワードの出現比率を可視化（出版年代ごとの出現頻度／出版年代ごとの総対象Number）」を選択した。

(4) 特に『児童研究』（一九八八年一月創刊、日本児童学会）はその後も継続的にホールが提唱した「アドレッセンス」について言及するなど、その影響力は大きい。日本の教育心理学研究の創始者とされる高島平三郎が創刊した専門研究月刊誌である。呉紅華「周作人と明治大正期の日本児童学——高島平三郎からの受容を手掛かりに」（『春水』手稿と日中の文学交流——周作人、冰心、濱一衛）国際シンポジウム論文集』二〇一八年二月）によれば、「当時の児童研究会会長であった元良勇次郎」をはじめとした関係者によって「ホールを中心とするアメリカ児童研究界との交流が盛んに行われ、『児童研究』にもその活動状況を紹介する記事がしばしば掲載された」とある。

※ 本稿において宮沢賢治の表記は「沢」、「アドレッセンス」の促音は大書き、「子供」（合評「童話について」に倣って）で表記を統一しているが、引用に際してはその限りではない。

付記 本稿は、北海道教育大学語学文学部の令和五年度語学文学会学術研究会（二〇二三年一月七日、於・北海道教育大学札幌駅前サテライトおよびオンライン）での研究報告をもとにまとめたものである。貴重なご質問やご意見をくださった皆様は心より感謝申し上げます。